

持続可能な社会の実現に向けて、家族・地域の一員として豊かな生活を実践できる生徒の育成

—自立した消費者として責任ある行動ができる力を育む学習活動を通して—

IX 第8分科会 消費生活・環境

1 はじめに

新学習指導要領では、これまでの4つの内容を「A 家族・家庭生活」、「B 衣食住の生活」、「C 消費生活・環境」の3つの内容としている。

今回の改定では、「C 消費生活・環境」において、現金に代えて電子マネーやクレジットカード等が浸透し、キャッシュレス化が進行していることや、民法改正による成年年齢の引き下げにより契約が可能になることから消費者被害の低年齢化を踏まえて、『計画的な金銭管理、消費者被害の回避と適切な対応』の内容が加わった。

そこで本研究では、課題をもって持続可能な社会の構築に向けて考え、工夫する活動を通して、身近な消費生活と環境について工夫し、創造しようとする実践的な態度を育てる学習方法の研究を進めた。

2 研究のねらい

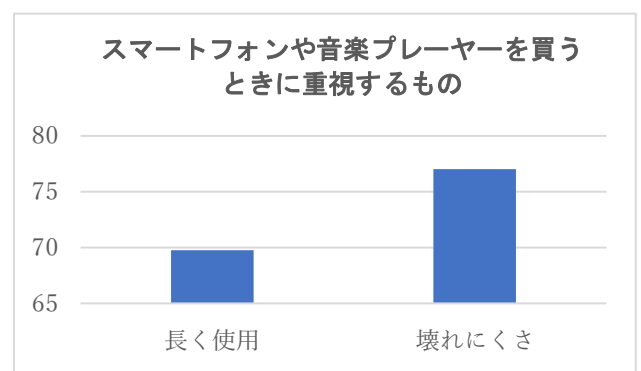
(1) 生徒の実態について

第1学年から第3学年の生徒を対象に、8項目のアンケート調査を実施し、生徒の実態を把握した。

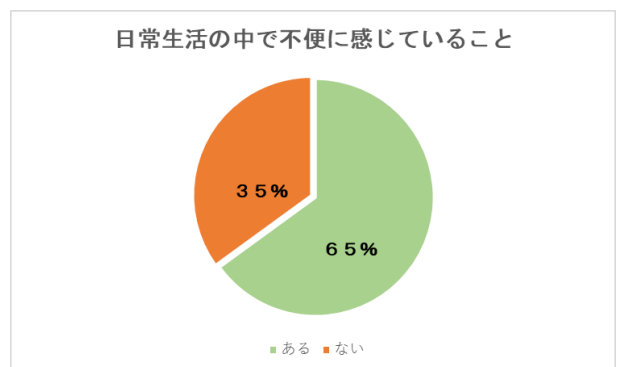
その結果、35.4%の生徒が自分の日常生活に不便を感じていないと答えており、その中でも不便さを解決するために考えていることがないと答えた生徒が50.9%いるという実態が分かった。また、これからの地球環境について不安に思っていることや関心を持っていることがあると答えた生徒は88.0%いたが、実際に「あなたがスマートフォンや音楽プレーヤーを買う時に重視するもの」では「環境破壊」は11.3%、「省エネルギー」では25.7%と実際の場面ではできていない生徒が多い実態が明らかになった。

さらに、購入する際に重視しているものとして、「壊れにくさ」や「長く使用」できるという視点に

おいては77.0%、69.7%の生徒が重視していると答えたが、その一方で「リサイクル」や「資源」については9.7%、7.0%に留まった。



以上の結果から、環境問題についての関心はあるものの、実際に消費生活の場面において環境や資源を考えた商品の選択購入にまで及んでいない現状であることがわかる。自分で自分の生活を工夫することが大切であるとわかっていても、実際にどのようなことを考え工夫すればよいかかわからず、それについての技能や知識は乏しいのが現状であることがわかる。



そこでC分科会では、「消費生活・環境」の学習において生徒の生活や学習の実態をふまえ、次のことを課題とした。

- ① 金銭の管理と購入の問題に自ら気づき、解決を目指す指導の工夫
- ② 消費者の基本的な権利と責任などについて理解し、責任ある消費行動を工夫するための指導の工夫
- ③ 環境への影響を考慮して消費生活を工夫する指導の工夫

(2) 目指す生徒像

- ① 実践的・体験的な学習活動を通して、消費生活・環境に関する知識及び技能を身に付けた生徒
- ② これからの生活を展望して、身近な消費生活と環境についての課題を解決できる生徒
- ③ 身近な消費生活と環境について工夫し、創造しようとする生徒

(3) 研究仮説

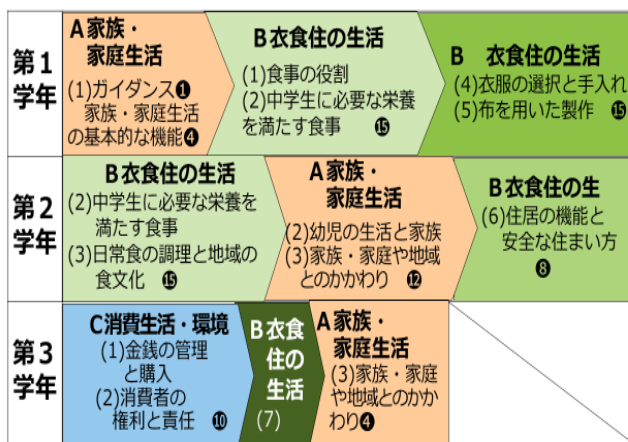
生活に即した学習内容をPDCAサイクルによる学習過程を重視し展開することで、基礎的・基本的な知識や技能を身に付け、持続可能な社会を目指して主体的に課題を解決し生活を工夫し創造する生徒が育つであろう。

3 研究内容

家庭分野の主題である「持続可能な社会の実現に向けて、家族地域の一員として豊かな生活を実践できる生徒の育成」から、C分科会では、研究テーマを「自立した消費者として責任ある行動ができる生徒の育成」と設定した。

(1) 指導計画の工夫

◆3年間を見通した年間指導計画の作成



① 3年間の指導計画の工夫

私たち消費者が生活する上で欠くことができない消費活動において、必要な物資やサービスを適切に

「購入する」ことや、自分のことだけでなく家族や家庭全体の収入や支出について考慮しながら「購入する」ことは、中学生にとって実感が湧きづらく、自分のこととして考えることが難しい状況がある。

そこで「A 家族・家庭生活」における「家族・家庭の基本的な機能」や「幼児や高齢者との関わり」、「B 衣食住の生活」においては、環境の学習と関連させながら、食品や衣服等の選択や調理・製作などの学習を、第1、2学年に位置付けて履修することで、これまでに身に付けた知識・技能を「C 消費生活・環境」の学習の中で活用しながら、表面的ではなく、現在の自分やこれからの自分の問題として捉えて考え、主体的に学ぶことができると考えた。

また、家計は社会全体の経済の動きと連動するため、社会科(公民的分野)と関連を図る必要がある。

それを踏まえ、第3学年で履修し、望ましい消費者としての意識をもたせて、地域や社会が学習範囲となる高等学校の学習へつなげていきたい。

② 題材の指導内容の工夫

本題材を全10時間として「自立した消費者」をテーマに、金銭の管理と購入及び消費者の権利と責任の内容を扱い、題材を工夫して指導の充実を図った。

また、中学生にとって身近な生活に沿った、ストーリー性のある内容を構成した。このことによって、よりよい消費生活の実現に向けて課題を解決していく力を、生徒が一連の学習過程の中で身に付けていけることを自覚できるようにした。

10時間の指導計画		
時間	題材名	学習内容
1	消費者としての自覚	自分の消費生活の課題設定
2	いろいろな購入方法	購入方法と支払い方法について
3	売買契約と支払い方法	模擬家族へのアドバイス
4	計画的な金銭管理	物資・サービスの選択に必要な情報の収集・整理
5	物資・サービスの選択	消費者被害を回避する方法や適切な対応
6	消費者被害の対策	売買契約について
7	消費者権利と責任	消費者の基本的な権利と責任
8	消費生活が環境に及ぼす影響	消費生活を振り返り、どのような消費行動が実践できるか
9	自立した消費行動	SDGsの視点から自立した消費者の行動を考える
10	自立した消費者	よりよい消費生活の実現に向けて

(2) 問題を見極め課題を設定する学習活動について

10時間を4つのまとまりに分けた各題材は、PDCAサイクルによる一連の学習過程を踏まえた展開を重視し、「見方・考え方」を「持続可能な

社会の構築」の視点からよりよい消費生活を工夫することとして捉えて構成した。

P 課題の発見、解決方法の検討と計画：課題の発見では、物資に恵まれた生活の写真や支払い方法の変化のグラフ、生活を及ぼす環境問題の写真等から、自分の消費生活の課題を設定した。そして、自立した消費者になるためには、これからどのようなことを知り、また何ができるようになればよいかを考えさせた。

D 課題解決に向けた実践活動：計画的な金銭管理や消費者の権利と責任などについて、中学生にとって身近なストーリー性のある題材を工夫し解決に向けた実践活動を行った。また、学習活動の工夫として模擬家族を設定し、家族会議を開き多様な意見を取り上げ検討する場面も設定した。

C 話し合いの結果を発表し、改善策を検討する：消費生活が地球規模の課題に影響している写真等から、自分の消費生活を振り返り、どのような消費行動が実践できるか考察し、SDGsの視点からポスターにまとめる。

A 改善を踏まえた過程での実践に向けて：自立した消費者となるための消費行動について自分の考えを発表し、よりよい消費生活の実現を目指して自分の決意を、ポスターに追記する。

このような学習過程を経ることで生徒が課題解決する方法を体得し、課題を解決する力が身に付き、身近な課題を主体的に解決しようとする態度が育成されると考える。

また、他者と対話する活動を通して、さまざまな気づきを生み出し、他者の意見が影響して悩んだり不安を覚えたりして葛藤し、思考・判断・表現していく。このことが生活の中で生きて働く知識や技能の習得につながるのではないかと考えた。

(3) SDGsの取組

物資やサービスの選択・購入、自立した消費者としての行動についてSDGsの視点から課題解決に向けて考察しポスターにまとめる。さらに、よりよい消費生活の実現を目指して自分の決意を、ポスターに追記させた。

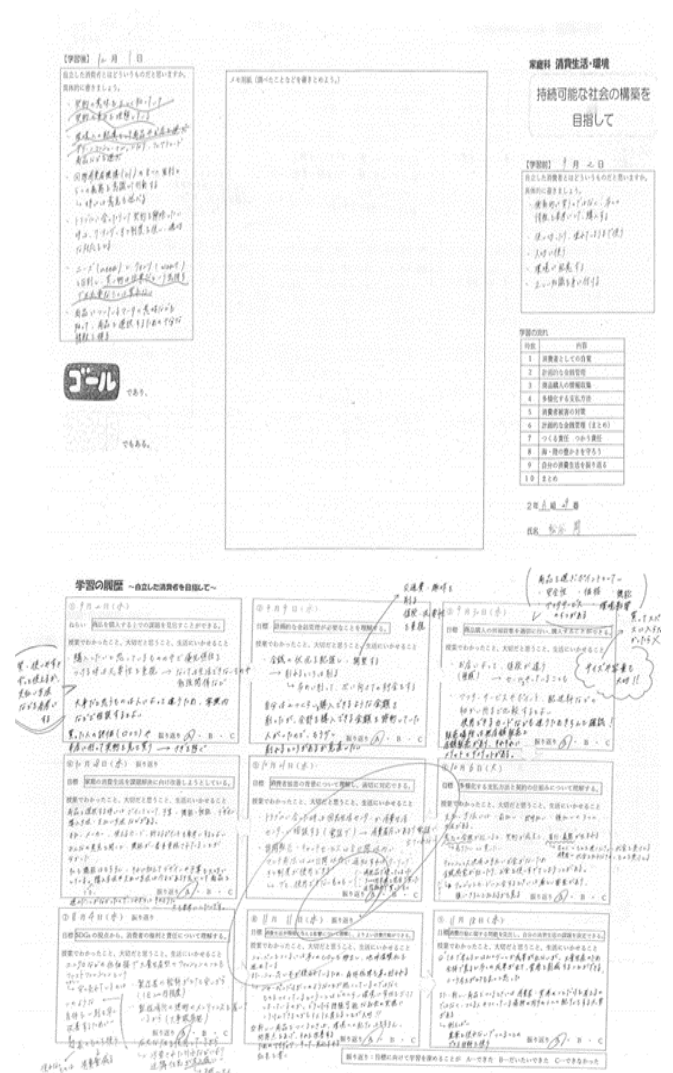
(4) 教材教具の工夫

① ポートフォリオ

自立した消費者としての自分の学びの足跡を視覚的にみとれるようなワークシートとした。また、1時間目と10時間目に「自立した消費者とはどういうものだと思いますか。」という問いを投げかけ学習前と学習後で自分の考えがどう変わったかをみとれるよう工夫した。

② ゲストティーチャー

第3時にはゲストティーチャーを呼び、売買契約の仕組みと多様化する支払い方法について専門的な知識もいれながら授業を行った。



<導入>

模擬家族の説明

<展開>

優さんの家族のある月の収支表を見ながら、購入したいものについて、優先順位をつける。

優さんの家族が必要なものを購入するために、限られた家計の中で調整できるものがないか考える。

発表する

<まとめ>

自分たちの決めた支払い方法にした場合、翌月以降の金銭管理において、どのようなことに気を付けたらよいかアドバイスをする。

4 成果と課題

(1) 成果

① 指導計画の工夫

社会科の「B 私たちと経済」の内容と連携することで、社会生活の中での経済活動として、生徒が現実味をもって計画的な金銭管理の必要性を捉えることができていた。9時間目と10時間目の解決に向けた実践活動により、自立した消費者になるためには具体的にどのように行動すればよいのかSDGsの視点から考えを深めることができた。また、中学生を含む模擬家族を設定し、自分なりの本質を見極める導入を工夫したことにより、消費生活の問題に気付き解決すべき課題に主体的に消費生活を工夫しようとする生徒の姿がみられた。

② 問題を見極め課題を設定する学習活動について

中学生にとって身近な生活場面を取り上げ展開したことが、生徒の興味・関心を高め意欲の維持につながった。また、生徒の身近な生活との関わりを重視し、自己の生活の質の向上とともに、家庭における実践に結びつけることができるようにしていくための題材の工夫をしたり、課題解決に向けて自分の考えを構想し表現したりする学習活動を設定することを通して「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を実現することができた。

③ 教材教具の工夫

専門的な知識を持ったゲストティーチャーを講師に招き授業を行ったことで、三者間契約や二者間契約の違いなどについてより具体的な事例をもとに契約の重要性について理解を深めることができた。ま

た、ポートフォリオを使用し、自立した消費者を目指してどのようなことが大切なのか、生活生かせることはなにかを毎時間自分の言葉でまとめさせることにより、よりよい消費生活の実現に向けて、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を育むことができた。

④ SDGsの取組

SDGsの視点から自立した消費者としての行動とは何かを関連付けてポスターにまとめることにより、日常生活を変えていくことが地球規模の課題を解決することにつながっていると気付くことができた。

(2) 課題

① 地域社会、企業などとの連携

学習した内容を実際の生活で活かす場面を設定することにより、自分の生活が家庭と深く関わっていることは認識できた。今後は、地域社会や企業との関わりについても気付くことができ、自分が社会に参画し、貢献できる存在であることにも気付かせていきたい。

② カリキュラム・マネジメントの推進

社会科（公民的分野）の学習との関連が不可欠なことから、社会科との担当教員との連携を密にし、教科横断的な指導計画の工夫を行っていく。

③ 実践的・体験的な活動の充実に向けたICT機器の活用

消費者被害や、自分や家族の消費生活が環境や社会に及ぼす影響などについて科学的な理解を深めるために、消費者被害の背景に関するデータを調査してまとめたり、生活排水や消費電力等に関する実験など実践的・体験的な活動を充実させていくことが課題である。そのため、情報の収集や活用、データの処理、発表など様々な場面においてICT機器を授業で活用できるよう環境を整えていく必要がある。